

共同研究について

—— 海外研修から ——

渡 辺 啓 吾

昭和 54 年 9 月 13 日から 10 月 13 日までの 1 ヶ月間アメリカ・カナダ・西ドイツ・オーストリア・スイス・フランスの林業試験場や大学を訪問した。アメリカ・カナダは IUFRO (国際林業研究機関連合) の部会行事である「林業研究管理」の学習旅行に参加して、アメリカ・カナダ・オランダ・スイス・南アフリカの場長たち 18 名と 10 日間旅行した。また、ヨーロッパはひとり旅をした。この間に強く感じたことは、私がただひとりの東洋人であったからかもしれないが、白人同志の国際的親近性である。その第一に共通語をもっているのはいうまでもないが、たとえば、旅行メンバーのカナダの場長とオランダの教授はスイスの大学で同級生であったりスイスの場長の娘さんがアメリカに嫁いでいたりといったことがある。

研究についても国際間の共同研究がさかんである。たとえばアメリカの 78 年の中間規模の研究課題として、研究局長は次のものを紹介した。1) ダグラスファーのドクガ (3 百万ドル)、2) マイマイガ (3 百万)、3) マツのキクイムシ (2 百万) だが、1) と 2) はカナダとの共同研究がなされている。さらにハマキガについては **Canusa** プロジェクトと呼ばれる世界最大規模の共同研究 (8 百万) がアメリカとカナダの間で行われている。中欧では樹種や林型が単純だから、各国の森林経営は共通性、たとえば長伐期とか非皆伐とかをおびている。しかし各国研究者間にはプライドがあって緊張もあるようである。スイスの場長に、スイス国内で開く場合の国際研究会議での使用国語をきいたら、スイス人はドイツ語を使うが、フランス人はフランス語で答えて、なかなかやっかいだという。同時通訳方式を考慮中といていたが、これも考えてみれば濃密な国際共同研究が行われている証拠でもある。

国内での共同研究はどうか。カナダのオンタリオ州のスーサンメリーには、国立のグレートレイク林業研究センターと森林病害管理試験所が同じ建物にあり、前者は地域課題を対象にし、後者は全国対象の研究に当たっているが、互に密接な運営をしている。またオンタリオ州立の林業研究センターがトロント郊外にあるが、国立と州立の両センターは林業研究委員会のもとに多くの共同研究をしている。

林業以外の部門との共同研究はどうか。この旅行で集めた 300 ほどの文献のなかからみるとスイス林試の報文「スイスにおけるヨーロッパ土地憲章」では 10 カ国の広分野の共同研究活動があることがうかがわれ、「限界取益地における土地利用についての技術的経済的評価」には、農・林・社会経済・文化的評価にわたる報告がのせられている。

道立試験機関の間ではときに共同研究の声があるが、熟していかない。島国の国民性とか、タテ割り行政とかいわれることがその理由でもあろうか。

(場長)